

「農業を仕事として選んで正解であった」

～ハウスぶどうと野菜の専門経営～

魚住嘉彦さん

就農コース第11期生（H27年9月修了）

インタビュー：令和9月26日

1. 現在の農業経営概要

野菜（無加温施設、露地）＋ぶどう（ハウス）、作付面積 2.5～3.0ha（内ハウス 42 a 11 棟）。本人名義の土地は実面積 50 a 程度で、残り 1 ha あまりは賃借で確保している。実家の農地は他に 120～150 a あるが、父が水稻を作付けしている。父は退職後、水稻作を行い、自分とは経営は別である。



年間出荷を考えると多品目となり、野菜はレタス、セロリ、ピーマン、枝豆等で。レタスは2作で延べ約 80 a、ピーマンは抑制でハウスで栽培している。

もう一つの柱のぶどうは 15 a で一部を除いて根域制限栽培で、様々な品種を導入して改植中。蒸し込み時期や防除のタイミング、果実袋種類、花ぶるい対策等々を試行錯誤中で、早期収穫を目指している。ぶどうの面積は増やしたいが棚等の資材が高いため、まずは野菜のハウス建設を優先した。なお、ハウス 9 棟分は農業施設貸与事業を活用した。



売り上げは野菜がメイン。地域では土地利用型の営農組合活動が盛んでブロックローテーションをしているため大規模経営の面積を確保するのが難しいため、小規模で反収を上げられる品目を選んだ。品目としてはレタスが有望か。

販売はほぼ J A 直売所で、イオン等 J A 関連の店舗にも出荷。野菜の一部は市場出荷である。販売先は開拓しなくても口コミで増えていき、現状では販売には困っていない。

労働力は本人＋パート 5 人だが、栽培管理等については充分には手が回っていない。



ない。パートは明石市、加古川市、稲美町等から来てもらっている。JAのインディード提携募集、人づて等で確保。継続期間は数ヶ月～長い人で5年。以前は常勤もいたが、現在はいない。パートのできる仕事を常に作っておく必要があり、自身はJA青壮年部や青年クラブの活動なども含めて忙しく、パートの育成には骨が折れる。本人と5年継続のパートの2名で仕事の段取りをつけている。なお、機械作業はほぼ本人が実施している。令和5～6年に経営の方針を定め、ぶどうで最大限の利益を確保できるようになったら法人化したい。

地域内では70歳代が多く、若手は3名程度（50歳代、30歳代）であり、間の年代が不在。今後、畦草刈り等地域の維持管理が心配ではある。

2. 就農・研修をめざした経緯

県立農業高校出身だが、専門はバイオ関係。大学（非農業）卒業後数種類の仕事に就いたが、自身の人生を自分で決めたいとの思いがあって30歳代から自営業を目指していた。実家は兼業農家で農地と機械はあり、もともと外作業は好きだったため農業を選択した。ぶどう栽培に興味があり、楽農生活センターのぶどうの学校へは行っていた。ぶどう主体+野菜での就農を計画し、就農コースに入学することとした。

3. 就農コースについて

就農コースでは野菜の基礎や根本を学べた。一般的な家庭菜園では作付けないような様々な品目を試作し、栽培管理の基本的技術と考え方、対処方法、防除のタイミング等を学び、実践できたことは就農に向けて有意義であり、指導員にはお世話になった。個人的には勝負の早い品目が性に合っていることが分かった。就農前後に国の農業次世代人材投資資金（準備型、開始型）が受給できたことも就農の助けとなった。



就農した後に遭遇するいろいろな課題、例えば、畝立てのスケール感、排水対策等対処しなければいけない事項があることを伝えておくとなお良いかもしれない。また、農薬については年々新たなものが出てくるので、もう少し詳細に伝えても良いと感じる。やってみて覚えるものではあるが、防除は資材の選択やタイミング等、やはり難しい部分がある。専業で農業を行う上でほぼ必須事項となるため、知識は多いほうが良い。

なお、現在ぶどうについては地域の普及センターと、野菜に関してはJA青壮

年部の専業農業者と相談している。

4. 自身にとって農業とは

農業経営は開始時のイメージ通りで、仕事として選んで正解であった。最初の1・2年は不慣れで失敗も多かったが、色々と試行錯誤しながら今のスタイルに行きついた。実際にやってみてわかることがあるし、時には条件に合わせることも必要。令和4年度は品目や作型を試した部分も多く後手後手に回ったが解決策等判断はついており、次年度以降は管理も落ち着いてくる目途がついている。

農業では、管理作業をまめに行うことや、天候を見て畝たて等事前にできることを実施しておくこと、競争相手の少ない作型を選択すること、大きな失敗をしないようにすること、機械メンテ等自分でできることはすること等が継続のキモ。また、他の農業者等横のつながりは予想以上に広がり、情報収集源となっている。今後も大切にしていきたい。台風被害等理不尽なことも多いがこれも農業にはつきもの。うまく付き合いながら自身にできることを模索していくことが大切である。